

教育研究業績書

2016年10月01日

所属：日本語日本文学科

資格：教授

氏名：徳原 茂実

研究分野	研究内容のキーワード
日本古典文学	和歌、物語、日記
学位	最終学歴
学術博士, 文学修士	神戸大学大学院 文学研究科 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. 王朝歌物語選	1993年03月	伊勢物語の全文と、大和物語・平中物語・古今集・後撰集・伊勢集・一条摂政御集の抄出から成る。頭注、解説、系図、年表、和歌初句索引を付した。青木賜鶴子との共編。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 学位	1982年03月	学術博士（神戸大学）学博い第5号
2. 学位	1979年03月	文学修士
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 百人一首の研究	単	2015年09月05日	和泉書院	『百人一首』の成立や構成、あるいは所収和歌の解釈、歌語歌枕、歌人伝などにかかわる21の論考を収める。巻末に人名索引、和歌索引を付す。
2. 三十六歌仙集（二）	共	2012年03月	明治書院	徳原茂実, 新藤協三, 吉野瑞恵, 西山秀人 平安時代中期の歌人の私家集「元輔集」「兼盛集」「重之集」「小大君集」の校注と解説を担当した。全473ページのうち248ページを執筆。
3. 紫式部集の新解釈	単	2008年11月	和泉書院	紫式部の家集『紫式部集』の解釈研究を中心とし、同集の成立に関する研究や、紫式部の伝記研究にも言及した。
4. 古今和歌集の遠景	単	2005年04月	和泉書院	第一章 光孝朝の和歌活動 第二章 撰者時代の和歌活動 第三章 平安時代の古今集享受 あとがき
5. 古今和歌集研究集成・第一巻	共	2004年01月	風間書房	「歌合と屏風歌」をテーマに執筆した。
6. 躬恒集注釈	共	2003年11月	貴重本刊行会	藤岡忠実・徳原茂実 平安時代の歌人、凡河内躬恒の家集（個人歌集）『躬恒集』の注釈である。『躬恒集』諸本の中では最も歌数が多く（481首）、原資料を多く含む西本願寺本を底本とし、本文、現代語訳、語釈、補説によって構成した。巻末には躬恒の伝記と和歌、『躬恒集』の伝本、西本願寺本『躬恒集』についての解説を付した。さらに「主要語句索引」と「初句索引」をも付した。『躬恒集』研究史上最初の本格的な注釈である。担当（pp. 3～348, pp. 361～384）
7. 和歌 解釈のパラダイム	共	1998年11月30日	笠間書院	小川、田中、徳原、加藤、藤田、杉田、田中、山本、武田、小川、日比野、浅田、黒田、柏木、藤平、鈴木、櫻井、神作、鈴木 徳原は「清涼殿東庭の松が浦島—西本願寺本躬恒集の本文校訂—」と題する論文を掲載し、延喜九年九

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
8. 百首贅々 百人一首夷曇	共	1997年03月20日	和泉書院刊・百人一首注釈書叢刊(18)	月十三日における宮中歌会の事実を指摘するとともに、その文学史的、文化史的意義について論じた。福島理子との共編著。徳原は江戸時代後期の神道家、玉田永教(1756~1836)が著わした百人一首注釈書『百人一首夷曇』の翻刻と解説を担当した。永教は上方講釈の始祖として著名な人物であり、本書には神道講釈のために各地を遍歴した永教の経験が反映している。
9. 歌枕を学ぶ人のために	共	1994年03月	世界思想社	片桐洋一編『歌枕を学ぶ人のために』のうち、「摂津の歌枕」を執筆した。芦屋と生田にかかわる伝説と歌枕を中心に論じた。
10. 和歌文学論集9『百人一首と秀歌撰』	共	1994年01月	風間書房	樋口、川村、渡辺、寺島、辻、島津、高城、菊地、名児耶、河田、井上、岡、中田和歌文学論集全十巻のうち第九巻『百人一首と秀歌撰』に「百人一首成立論の変遷」と題して執筆した。本稿は百人一首の享受と影響について、特に百人一首がいつ、いかなる意図のもとに、だれによって、いかなるいきさつをへて作られたのかについての中世以来の伝承や諸説をたどり、享受史の一側面を描き出そうとしたものである。最後に筆者自身の百人一首成立論をも掲げたが、これは従来の基本資料の読み方に反省をうながす画期的な論であると思う。
11. 和歌文学講座5『王朝の和歌』	共	1993年12月	勉誠社	犬養廉、松谷寿郎、柏木由夫、川村晃生、菅根順之、松野陽一、樋口芳麻呂、山田洋嗣、増田繁夫、金原理、神作光一、久保木哲夫、久保木寿子、森本元子 和歌文学講座全十巻のうち第五巻『王朝の和歌』に「歌合の成立と展開」と題して執筆した。本稿は、歌合の成立について、従来とはちがった観点から、即ち、非文学的要因に重きをおく従来の考え方を排し、より文学史的な要因を重視して論究した。その結果、歌合とは本来競技的要素よりも文学的要素の強い、合わせての調和の妙を楽しむ集いであったこと、十世紀の中ごろに競技中心の歌合へと変質したことを結論としてのべた。(pp.145-163)
12. 王朝歌物語選	共	1993年03月30日	和泉書院	青木賜鶴子との共著。「伊勢物語」はその重要性に鑑み、全125段を収録した。「大和物語」と「平中物語」からは主要な章段を抜粋した。さらに「古今集」「後撰集」「伊勢集」「一条摂政御集」の物語的部分をも収録して、平安前期歌物語の世界を一望することができる内容とした。
13. 新編国歌大観 第七巻 私家集編III	共	1989年04月10日	角川書店	「躬恒集」の翻刻・校訂と解説を担当した。
14. 武庫川女子大学図書館蔵百人一首文献目録	単	1989年03月31日	武庫川女子大学国文学科徳原研究室	武庫川女子大学図書館所蔵の百人一首関係資料の目録。第一部「写本・板本」には85点、第二部「活字本」には37点の資料を取り上げ、その書誌情報を記載した。
15. 王朝和歌の世界	共	1984年10月30日	世界思想社	片桐洋一、三木雅博、片山享、山本登朗等との共著。全一三章、271ページからなる。第三章「屏風歌における自然」を執筆した。(pp.43-59)
2 学位論文				
1. 平安和歌の生成と伝流	単	1982年03月31日	神戸大学 学博い第5号	古今集時代の和歌は、いかに詠まれ、いかに享受され、いかに伝承されたか。その様相をできるだけ多角的に、新しい視点から観察し、平安前期和歌史を再構築すべく試みた論考である。800枚に余る論考は三篇から構成され、平安和歌の詠作、享受の場と伝承の様相についての探求が、各編においてなされている。
3 学術論文				
1. 土左日記略注(二)	単	2016年03月10日	『武庫川国文』第八十号	『土左日記』の元日条から一月十日条までの中から、問題となる箇所について私見を述べ、いくつかの新解釈を提示した。
2. 土左日記の冒頭文について—小松英雄説批判—	単	2016年02月26日	『日本語日本文学論叢』第十一号	小松英雄著『古典再入門 『土左日記』を入りぐちにして』(平成十八年十一月 笠間書院刊)にて主張されている、『土左日記』の冒頭文についての新解釈に批判を加え、併せて著者の『土左日記』観について述べた。
3. 土左日記略注(一)	単	2015年11月30日	『武庫川国文』第七十九号	『土左日記』の発端(十二月二十一日)から十二月二十九日条までの中から、問題となる箇所について私見を述べ、いくつかの新解釈を提示した。
4. 土左日記を読みなおす	単	2015年03月05日	『日本語日本文学論叢』第十号	『土左日記』巻末、2月16日条の帰宅の場面について検討し、それが従来言われているような、前国守(あるいは紀貫之)の屋敷への帰宅ではなく、この作品の作者とされている女性宅への帰宅であることを

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
5. 『和歌文学大辞典』項目執筆	共	2014年12月01日	古典ライブラリー	明らかにした。それによって、作中で死を悼まれている女兒についても、それは女性作者の一家の子供であることが明らかとなり、前国守（あるいは紀貫之）の子供であるという定説も否定される。 『和歌文学大辞典』に、次の17項目について執筆した。
6. 土左日記「船のをさしける翁」について—前国守（船君）像の確定へ—	単	2014年11月01日	『武庫川国文』第七十八号	躬恒、贈答歌、紫式部、唱和、対詠、内裏菊合、亭子院殿上人歌合、独詠歌、躬恒集、陽成院歌合（延喜十二年）、陽成院歌合（延喜十三年）、前裁合、常康親王、奈良帝、仁和中将御息所歌合、杯酌歌、雅正
7. 高野切古今集の本文について	単	2014年03月05日	『日本語日本文学論叢』第9号	平安時代の名筆として著名な高野切は、『古今集』の本文研究において貴重な資料であるという見通しのもと、その詞書、作者表記、和歌本文、巻名などについて、ひとつおりの考察を加え、高野切が元永本や伝公任筆本などと同様、平安時代における流布本文の実態を今に伝えていることを明らかにした。
8. 蜻蛉日記の屏風歌と安和の変	単	2013年11月01日	『武庫川国文』第77号	『蜻蛉日記』中巻、安和二年八月条に九首の屏風歌が収録されている。本稿ではこれら屏風歌とその前後の本文について、従来とは異なった解釈を試み、作品と歴史的事実とのかかわりについて新たな説を提唱した。また、これら屏風歌と同時の作とされてきた『元輔集』の屏風歌について、別時の作であることを論じた。
9. 西院の中島の松に書かれた「落首」	単	2013年03月05日	『日本語日本文学論叢』第8号	「後撰集」巻十五に収録されている「音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり」という一首は、正子内親王（淳和天皇）の出家生活をたたえる歌のように見えながら、実は承和の変（842年）を不正な陰謀として批判する落首であったろうことを論じた。
10. 清少納言と藤原実方との贈答歌について	単	2012年11月10日	『武庫川国文』第76号	一条朝宮廷におけるスター級存在である藤原実方と清少納言が交わした恋愛贈答歌がただ一組、現在に伝えられている。ところが、この貴重な贈答歌についての従来の解釈が誤っているため、このやりとりがなされた時の清少納言の実方に対する思いが全く理解されていない。本稿では「かはらや」と「あしのや」という歌語を正しく理解することによって、奥州下向を控えた実方に、清少納言がいじらしくも率直な恋心を表明していることを明らかにした。
11. 東三条院法華八講菊合をめぐって	単	2012年03月	『日本語日本文学論叢』第七号	歌合の基本文献である萩谷朴著「平安朝歌合大成」に「（長保四年）十月故東三条院追善八講菊合」として取りあげられている菊合は、実は東三条院詮子の存命中に催された法華八講の後宴菊合であったことを、「小大君集」や「赤染衛門集」の正確な読解をもとづいて立証した。
12. 古今集仮名序冒頭部の和歌史観（査読付）	単	2011年11月	『国語と国文学』平成23年11月特集号	『古今集』仮名序の冒頭部「やまとうたは、ひとのころをたねとして、よろづのことはとぞなれりける」について、和歌という文学ジャンルの確立宣言であるという新たな解釈を提示し、仮名序全体の解釈についても、新たな提案を行った。
13. 末の松山を越す波	単	2011年11月	『武庫川国文』第七十五号	歌枕「末の松山」の淵源となった『古今集』の著名歌「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も超えなむ」は、古代東北地方の太平洋岸を襲った大津波の記憶を秘めた一首であることを論じた。
14. 在原行平の離別歌をめぐって—離任時説の再検討—	単	2011年03月	『日本語日本文学論叢』第6号	百人一首で著名な在原行平の「たちわかれ因幡の山の峰におふるまつとききかば今帰りこむ」の詠作事情についての通説を再検討し、独自の結論を導き出した。
15. 小野篁の船出—「わたの原八十島かけて」考—	単	2010年11月	『武庫川国文』第74号	百人一首で著名な小野篁の歌「わたの原八十島かけてこぎいでぬと人にはつげよあまの釣り船」の詠作事情についての通説を再検討し、独自の結論を導き出した。
16. 『紫式部集』自撰説の見直し（査読付）	単	2010年06月	『中古文学』85号	紫式部の家集『紫式部集』については、自撰説が通説であったが、私家集研究の観点からこれを再検討し、他撰説を提唱した。「巻末増補の観点をも視野に入れて」という副題を付した。
17. 紫式部詠「めぐりあひて…」の本歌をめぐって	単	2010年03月	日本語日本文学論叢第5号	紫式部の著名歌「めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲隠れにし夜半の月かな」について、その本

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
18. 百人一首の中の三十六歌仙	単	2009年10月	武庫川国文 第73号	歌が小大君の歌であろうことを論証した。 百人一首に採られた歌人のうち、三十六歌仙に属する25名について、その百人一首の中に占める位置について考察した。
19. 百人一首の人麿と定家	単	2009年03月	武庫川国文 第72号	百人一首に採られている藤原定家の和歌と、中世において柿本人麿の代表作とされていた和歌との類似性を指摘し、その意味について論じた。
20. 源氏百人一首（翻刻）	単	2008年12月	武庫川国文 第71号	黒澤翁麿の『源氏百人一首』の翻刻と研究。
21. 夕霧の意地—藤裏葉巻における一文字の清濁をめぐって—	単	2008年12月	武庫川国文 第71号	源氏物語の藤裏葉巻の解釈について論じた。
22. 喜撰法師の和歌に見る宇治	単	2008年11月	関西文化研究叢書10『 関西文化のメカニズム』	六歌仙の一人として著名な喜撰法師の和歌の分析から、その文学史的な位置づけを試みた。
23. 紫式部の越前住還	単	2008年03月	『日本論日本文学論叢』第3号	紫式部は父為時の任地、越前武生に下向したことがある。その折の旅の記録が彼女の家集『紫式部集』に残されている。本稿はその記録を詳細に分析し、従来の説を正そうとしたものである。
24. 『紫式部集』自撰説を疑う	単	2007年11月	『武庫川国文』第70号	『紫式部集』は紫式部の自撰であるとする通説に対して異議をとなえた。
25. 歌語「高砂」考	単	2007年03月	『日本語日本文学論叢』第2号	従来の研究では、歌語「高砂」は播磨国の歌枕であるという説と、山を意味する普通名詞であるという説が併存し、和歌の解釈にあたっては、歌意と矛盾のない方を採用するという便法が行われてきた。本論文では、平安中期までの歌には全て名所歌枕として詠まれており、平安後期にいたって普通名詞説が生じ、この説に従って和歌が詠まれることも始まったと主張した。
26. 裳をつけた女三の宮—源氏物語絵巻「鈴虫」試論—	単	2007年02月	『武庫川国文』第69号	国宝源氏物語絵巻「鈴虫」（一）の画面で、従来女三の宮と考えられていた女性が、腰に裳をつけているという事実が、復元模写の過程で発見された。その事実を根拠に、この女性は女三の宮ではなく侍女であるという新説があらわれ、有力視されている。本論文ではその新説が成立しがたいことをのべ、女三の宮が仏前で裳を着けている描写にこそ、この画面のテーマが秘められていると主張した。
27. 「ふみを散らす」ということ—『紫式部集』三二番歌詞書を糸口として—	単	2006年10月	『武庫川国文』第68号	「ふみを散らす」とは私信を第三者に見せることであり、今も昔もそのような行為は不道徳である。ところが、平安時代の宮廷社会においては、スター級の殿上人や女房たちがやりとりした手紙は、書簡文学として流通していたようなのである。本論文は、その事実を初めて指摘したものである。
28. 清原元輔享年考	単	2006年09月	『日本語日本文学論叢』創刊号	平安時代の著名歌人であり、清少納言の父であることでも有名な清原元輔は、908年生まれ、没年は990年、享年83というのが通説である。本論文では、さまざまな状況証拠を積み重ねることによって、918年ごろの生まれ、享年73前後とする仮説を提唱した。
29. 「西の海の人」からの返歌	単	2006年03月	『武庫川国文』第67号	『紫式部集』15番歌から19番歌までの5首についての解釈をめぐる論。
30. 紫式部集における求婚者たちへの返歌	単	2005年11月	『武庫川国文』第66号	『紫式部集』の29、30、31番歌とその詞書の解釈についての論。
31. 紫式部夫妻の新婚贈答歌	単	2005年03月	『武庫川国文』第65号	「紫式部集」の83番歌（けちかくてたれも心は見えにけんことはへだてぬちぎりともがな）と84番歌とは、式部が藤原直孝と結婚する前の贈答歌と考えられてきた。本稿では、83番歌の初句「けちかくて」の語義の再検討などから、これらは結婚直後の贈答歌であり、84番歌に「夏衣」と詠まれていることから、彼らの結婚は春から初夏にかけてのことで、長徳4年の晩秋か冬のものとされている従来の紫式部年譜は修正すべきだと述べた。
32. 古今集の女歌 - 美人伝説の意味（査読付）	単	2004年11月	学燈社『国文学 解釈と教材の研究』2004年1月号	小野小町が絶世の美女であったという伝説は、古今集仮名序の「小野小町は、いにしへの衣通姫の流なり」という一文に由来する。筆者紀貫之の意図は、正史『日本書紀』によって絶世の美女であったことが保障されている衣通姫と小町を「流」という言葉で結びつけることによって、女性歌人の系譜に美人という筋を通すことにあった。天皇の歌集・古今集においては、女性は美しくなければならず、それに反する歌は慎重に排除されている。
33. 紫式部集四十五番歌の解釈について - ことわりや君が心の闇なれば -	単	2004年11月	『武庫川国文』第64号	「紫式部集」44、45番歌は、式部のモノノケ観をうかがうことができる例として著名であり、「源氏物語」研究にもしばしばとりあげられる。しかしこの両首と詞書についての従来の解釈には問題がある。特に45番歌の歌語「心の闇」については正解が得られていない。本稿では藤原兼輔の著名歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
34. 源氏物語におけることわざ	単	2004年03月	武庫川国文 63号	がふまえられているとする新説を提示し、納得できる解釈を施した。 源氏物語は語り手の言葉と登場人物の会話・心内語から成り立っており、当時の口頭表現の実態が反映しているはずなので、ことわざの類も多用されていると推測されるが、注釈書等でそれが指摘されることは多くない。本稿では、源氏物語の中には、諸注釈書においてことわざであると気付かれていないことわざが多くうずもれているのではないかと予測し、注意深い読解作業の結果、従来指摘されていないことわざ数種を提示した。全 (pp. 9)
35. 歌合と屏風歌 (査読付)	単	2004年01月	風間書房刊 古今和歌集研究集成 第一巻	歌合と屏風歌とは古今集の成立基盤や歌風形式と深くかかわっていると、かつては考えられていた。しかし私見によれば、古今集が成立した延喜5年当時、歌をめぐる人々の集いはさまざまであり、歌合はその中の一形態にすぎなかった。また当時屏風と和歌とのかわり方もさまざまであり、屏風歌はその中の一形態にすぎなかった。やがて歌合と屏風歌が特に流行し、延喜13年以後の古今集増補にそれが反映するという新説をのべた。全 (pp. 24)
36. 紫式部集四九番歌は夫宣孝の作—喪中求婚者説の否定—	単	2003年11月	『武庫川国文』第62号	夫藤原宣孝亡きあと、その喪に服している紫式部のもとに、早速求婚者が現れたとするのが、「紫式部集」49番歌以下3首にもとづく通説である。しかしこの説は、同集の歌が年代順に配列されているという大前提のもとでしか成り立たず、この前提をはずしてしまえば、これら3首は紫式部と生前の夫とのやりとりと解するのが自然である。本稿は「紫式部集」の配列と編者に関する通説への異議申し立てである。全 (pp. 8)
37. 歌語「松帆の浦」をめぐって (査読付)	単	2003年05月	風間書房刊 講座 平安文学論究 第十七輯	藤原定家の著名歌「来ぬ人を松帆の浦の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつつ」に詠み込まれている歌枕「松帆の浦」をとりあげ、その発生と展開について考察した。この地名は万葉集に見出されるが、その後定家によってとりあげられるまで和歌には詠み込まれていない。定家がそれを自作にとり入れた意図、その作を百人一首に撰入した意図、この歌枕がその後さほど多くは歌に詠み込まれていないことの意味などについて考えをのべた。全 (pp. 22)
38. 源氏物語とことわざ	単	2003年03月	観智院本世俗諺文漢字一字・出典索引並びに研究	『源氏物語』の注釈書に、ことわざの存在が指摘されることは少ない。しかし、当時の話しことは、語りことばで書かれている『源氏物語』の中に、ことわざが多用されていないとは考えがたい。後世の読者がそれに気付いていないだけではないか。本稿ではこのような観点から、緻密な読解によっていくつかのことわざを作中から発見し、『源氏物語』が当時のことわざの宝庫であることを示唆した。
39. 葵上の登場	単	2003年03月	武庫川国文 61号	『源氏物語』桐壺の巻において、光源氏と葵上との結婚の場面に、「女君はすこしすぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、にげなくはづかしとおぼしたり」とある。従来の解釈では、「にげなくはづかし」と思ったのは葵上であるとされ、その上に立って葵上という人物が論じられているが、本稿ではそれは光源氏の思いであると主張した。そして、従来の解釈は近世近代の中産階級の先入観にもとづく誤った解釈であるとのべた。全 (pp. 9)
40. 紫式部集巻頭二首の詠作事情 (査読付)	単	2003年02月	和泉書院刊『古代中世和歌文学の研究』	『源氏物語』の作者紫式部の家集『紫式部集』の巻頭には、「めぐりあひて」と始まる著名歌ともう一首とが、女友達の来訪に際して詠まれた二首として収められている。本稿では、この二首が詠まれたのは正暦元年(990)10月11日であり、女友達とは後に紫式部の夫となる藤原宣孝の娘であろうと推測した。また実践女子大学本『紫式部集』の祖本が藤原定家監督書写本であることを立証した。
41. 百人一首の巻頭歌と巻末歌の意義	単	2002年11月	武庫川国文 60号	『百人一首』巻頭の天智天皇の歌は、『日本書紀』において聖帝とされる仁徳天皇の、雨漏りのする皇居での質素な生活ぶりを想起させる。二首目の持統天皇の歌は、「衣干す」という女性の仕事に女帝が着目しての作であり、この二首は聖代の天皇夫妻の映像である。一方、巻末の順徳院の歌は、近代における皇居の荒廃ぶりを描き、巻頭歌と対応している。「のきば」への着目も、仁徳天皇の故事に由来する。以上、全くの新説である。全 (pp. 16)
42. 随筆『塩尻』命名の由来 (査読付)	単	2002年10月	解釈 48巻9・10月号	『塩尻』は国学者・天野信景(1663~1733)が著した大部の随筆で、その書名は信景本人によって付された。この書名の意味については従来、『伊勢物語』の難解語「しほじり」の語義を解明した信景が、それを記念して付したとの見解が有力だが、本稿では人見必大『本朝食鑑』の記事と『塩尻』の記事の

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
43. 古今集仮名序「歌のさま六つ」例歌存疑	単	2002年03月	武庫川国文 59号	類似性に注目し、従来の説を否定した上で、信景の意図について、新たな観点から考察を加えた。全 (p. 6) 古今集の仮名序に和歌の種類を六つに分類し、それぞれについて例歌をあげた、いわゆる「和歌六義」と呼ばれる一節があることはよく知られている。本稿では、それら六首の例歌が後世書き加えられたものであると推測した。仮名序には古来「古注」と呼ばれる、後世の付加であることが明らかな部分があるが、「古注」でなく、仮名序本来の本文とされている部分についても、後世の人々の手が加わっている可能性を指摘したのである。全 (pp. 7)
44. 難波津の歌の呪術性について (査読付)	単	2001年11月	和泉書院刊『王朝文学の本質と変容 韻文編』(片桐洋一編)	「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」は難波津の歌と呼ばれ、古今集仮名序において「歌の父」と特筆されている著名歌であるが、一方、木簡など多くの考古資料に見出される点でも注目される。本稿では、考古資料に書かれた難波津の歌を落書とみなす従来の説を否定し、難波津の歌は生命力を活性化させる呪力をもつ歌と信じられていたこと、作者を王仁とする説話は後世生み出されたであろうことなどを主張した。全 (pp. 16)
45. 古今集仮名序「みかどの御はじめ」考	単	2001年09月	武庫川国文 58号	古今集の仮名序に「なにはづの歌は、みかどの御はじめなり」という一文があるが、文中の「みかどの御はじめ」については、「朝廷で詠まれた最初の歌」と解釈するのが定説となっており、異論は存在しない。本稿ではこの説を否定し、「天皇の御製の最初である」と解釈すべきであると主張した。また、仮名序の本文は、紀貫之によって執筆された本文の上に後世の人々によってくり返し手が増えられたであろうことを指摘した。全 (pp. 10)
46. 古今集仮名序の「ことわざ」について	単	2001年07月	武庫川女子大学言語文化研究所年報 12号	古今集の仮名序に「世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るものきくものにつけていひだせるなり」という一文があり、筆者紀貫之の文学観を端的にあらわした一文として重要である。この文中の「ことわざ」については、従来「事業」の意と解されているが、本稿ではこれを否定し、「言語活動」の意と解すべきことを主張した。また中世においてはまさしく「言語活動」の意に解されていたことを指摘した。全 (pp. 12)
47. 源氏物語絵巻「鈴虫」第二画面の冷泉院について	単	2000年12月	武庫川国文 56号	国宝源氏物語絵巻の「鈴虫」第二画面において、光源氏と対座する冷泉院が、畳から前へ身をのり出し、板敷の上に座しているように描かれているのは、実父である光源氏に対して院が父子の礼をとっているものと解釈される。このように解釈することによって、この画面が、源氏物語の悲劇性を象徴する場面として描かれたことが明らかとなる。全 (pp. 16)
48. 雄略紀の「語在別巻」について (査読付)	単	2000年04月	解釈 46巻 3・4月号	日本書紀・雄略天皇条において、浦島子の記事の末尾に「語在別巻」(語は別巻に在り)と記されている。この「別巻」については、当時存在した浦島子伝であるとか、様々な説が提出されているが、本稿では従来の諸説を否定し、「別巻」は日本書紀に続く第二番目以下の国史をさしているのではないかと推測した。さらに「日本後紀」の散逸部分に浦島子が丹後国に帰還したという「事実」が記されていたのではないかと推測した。全 (pp. 5)
49. 明石姫君の五十日の祝いをめぐって	単	1999年11月	武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集 (和泉書院)	源氏物語の濤標の巻に、明石姫君の誕生日は3月16日、五十日の祝いは5月5日と明記されていることに注目し、そこにこめられた作者の意図について考えた。その結果、3月4日が共に大の月であるのは嘉き年であり、一条朝においてその嘉き年がめぐり来ることを期待する世相が作品世界に巧みにとり入れられているのではないかと推定した。全 (pp. 11)
50. 清涼殿東庭の松が浦島一西本願寺本躬恒集の本文校訂 (査読付)	単	1998年11月	笠間書院刊『和歌 解釈のパラダイム』所収	西本願寺本躬恒集10番歌の詞書の中に「松浦沙」ということばがあるが、意味不明である。字形の類似という点から推測すると、これを「松浦洲」と校訂することが可能である。するとこれは歌枕として著名な松が浦島を意味することとなり、延喜9年(909)9月13日の、清涼殿東庭における月の宴の実態が明らかになるのみならず、当時の文学、庭園、習俗などに関する多くの情報を得られることを指摘した。全 (pp. 14)
51. 百人一首夷曇をめぐって	単	1998年03月	武庫川国文 51号	「百人一首夷曇」(ひなぐもり)は江戸時代後期の神道家、玉田永教(ながのり)の手になる百人一首注釈書で、武庫川女子大学図書館に二本が所蔵されている。本稿ではこの二本(甲本、乙本)について検討を加え、乙本を増補して甲本が成立していること、甲本には著者が神道普及のために諸国を旅した

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
52. 有馬山猪名の笹原	単	1998年01月	和泉書院刊『阪神間の文学』（武庫川女子大学学芸部国文学科編）所収	経験が盛り込まれていること、乙本は明治期における浄土真宗本願寺派の重鎮、大洲鉄然の蔵書であったことなどを指摘した。全（pp. 6）
53. 康秀と朝康	単	1997年12月	武庫川国文 50号	平安時代中期の歌人大式三位の作「有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする」は、百人一首にも採られている著名歌であるが、この歌に詠み込まれている阪神間の歌枕、有馬山と猪名とをとりあげて、古典和歌の世界においてこれらがどのようなイメージのもとに詠みつけられていたのかを明らかにしようとした。全（pp. 12）
54. 八代集の服飾語彙	単	1997年09月	鳴尾説林 5号	古今集・巻五・秋歌下の巻頭歌二首の作者については文屋康秀の作とする伝本とその子朝康の作とする伝本が存在する。その巻頭歌は百人一首に康秀の作として採られている著名歌でもあるため古来議論があり、近年では朝康説が有力である。本稿では新たな観点からこの問題にメスを入れ、両説が存在すること自体に和歌史的な意義があることや、康秀説を否定する根拠がないこと等を論じた。全（pp. 9）
55. 伊勢物語の「しほじり」をめぐる近世期の言説	単	1997年03月	武庫川女子大学紀要人文・社会科学編 44巻	古今集から新古今集に至る八つの勅撰和歌集を八代集と称している。本稿ではこの八代集の中から服飾関係の語彙を全て抽出し、その時代的変遷について検討した結果、時代が下るにしたがって服飾語彙が減少すると共に、その多様性も失われていくことを確かめた。そして、その理由として、古代においては和歌の担い手は主に女性であり、時代が下るにしたがって男性の管理下に置かれることとなったという大きな変化を想定した。全（pp. 9）
56. 忍ぶることの弱りもぞする—もう一つの解釈を求めて—	単	1996年03月	武庫川国文47号	伊勢物語・第九段に見える「しほじり」なる語は古来難解の語として知られていたが、近世に至り、国学者天野信景がその語義を解明し、信景はそのことを記念して自らの随筆を『塩尻』と名づけたというのが定説である。本稿では、信景より前にすでに人見必大によって同様の説が提出されていること、信景は必大の説を祖述し、『塩尻』なる書名のいわれを語るために同書の巻頭にその一文を置いたにすぎないこと、等をのべた。全（pp. 9）
57. 桐壺巻の「みだりがはし」をめぐる—「栄花物語」巻一に及ぶ—	単	1995年12月	武庫川国文46号	百人一首にも採られた式子内親王の代表作「玉の緒よたえなばたえねながらへばしのぶることの弱りもぞする」については通常、「我が命よ、絶えるならば絶えてしまえ。もし生きながらえたら、思いをあらわすまいとする力が弱って、恋心があらわれてしまうかもしれないから」といった解釈がなされているが、内に秘めた思いが時とともに色あせるならいっそ今命よ絶えてしまえ、という別解も成立するのではないかとのべた。全（pp. 9）
58. 百人一首成立試論	単	1995年04月	『国文論叢』第45号	源氏物語桐壺巻に、桐壺更衣の母の歌「荒き風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞしづこころなし」について語り手が「乱りがはし」と評する場面がある。この「乱りがはし」を諸注「不作法」「失礼」などと解しているが、実は歌の「荒き風」という表現が帝に対し不敬であることを「乱りがはし」と評しているのであり、これが「吹く風枝を鳴らさず」という理想の裏返しであることを、栄花物語の一節とも比較しつつ論じた。全（pp. 10）
59. 隆房卿艶詞絵と絵詞をめぐる	単	1995年03月	武庫川国文45号38頁	『百人一首』の成立について、嵯峨中院山荘の障子に貼付する色紙に染筆するために選ばれた百首であったとする従来の定説を否定し、色紙に染筆されたのは『百人一首』の中から選ばれた若干の四季歌にすぎず、『百人一首』が作られたそもそもの目的は『新勅撰集』撰集の指針とするためであったとする仮説を提出した。
60. 歌語「もしほ」考	単	1994年12月	武庫川国文44号12頁	国宝「隆房卿艶詞絵」は、美術史上また国文学史上、重要な作品である。この絵巻については従来、絵詞（長歌1首と短歌3首）の作者及び絵巻の主人公は藤原隆房であり、この長歌を載せる隆房集の成立年代は1176年から1178年の間とされているが、本稿では絵詞（長歌）と絵との関連性を重視しつつ作品分析を行ない、その主人公は小督、長歌の成立年代は1180年の福原遷都以後、長歌の作者は不明であることを論じた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
61. 雪月花—和歌と漢詩—	単	1992年01月	角川書店刊『短歌』誌 1月号	るのかについても考究した。 大江千里（古今集時代の歌人）の和歌の享受の歴史を、千里集から新古今集に至るまで追跡調査し、白楽天の詩句が日本文学に受容される過程の一端を明らかにした。（pp. 102-104）
62. いく夜ねざめぬ須磨の関守 — 問いかげの構文—	単	1991年11月	『武庫川国文』誌 第38号	百人一首によってよく知られている源兼昌の「淡路島かよふ千鳥の鳴く声にいく夜ねざめぬ須磨の関守」という歌について、古来疑問とされてきた「いく夜ねざめぬ」の部分の語法について検討し、これが問いかげの構文であり、他にもいくつもの用例を見出していることを指摘した。（pp. 8-16）
63. 凡河内躬恒の一首から源氏物語へ （査読付）	単	1989年05月	和泉書院刊 『古今和 歌集連環』（藤原忠 美編）所収	百人一首にも収められている凡河内躬恒の著名な和歌の解釈について新説を提示し、さらにその新説を、源氏物語夕顔巻の中の一首の和歌の解釈に適用することによって夕顔巻全体の解説に再考の余地が生じることを指摘した。（pp. 227-245）
64. 躬恒集第一類本成立考（査読付）	単	1987年11月	『和歌文学研究』誌 第55号	躬恒集諸本の中で、第一類本として分類されている宮内庁書陵部蔵の二本が、従来言われているような躬恒自撰本ではなく、他撰本であることを実証し、さらにその原本というべき冷泉家本の存在を指摘した。なお、この原本の存在は、今時の文献調査によって確認された。（pp. 1-9）
65. 是則—古今和歌集の歌人たち—（ 査読付）	単	1987年03月	有精堂刊『一冊の講座 古今集』所収	古今集の有力歌人の一人である坂上是則を取り上げ、その伝記考証と、主要作品についての考察を行なった。
66. 和歌史上における光孝天皇の位置	単	1987年02月1 0日	「武庫川女子大学紀要」 第34集 国文学科 編	光孝天皇は、自身すぐれた歌詠みであったが、その在位期間（884～887）が和歌史の転換期にあたるという点において、注目すべき存在である。本稿では、光孝朝における天皇を中心とする和歌活動を検証し、それが一種の文化政策のレベルに達していることを明らかにした。そして、その文化政策が子息の宇多天皇、孫の醍醐天皇に継承され、「古今集」の勅撰につながったのではないかという仮説を提起した。（pp. 59-75）
67. 仁和中将御息所歌合管見	単	1986年11月	「武庫川国文」第28 号	「古今集」に見出される「仁和中将御息所歌合」は、最初期の歌合として和歌史上重要な位置を占めるが、その実態は明らかでない。本稿では諸資料の検討を通じて、その主催者を明らかにしようとした。
68. 伊勢物語第十二段の再検討	単	1985年11月	「武庫川国文」第26 号	「伊勢物語」第十二段について新解釈を提示し、これが愛の危機と再確認をテーマとする、いわゆる「歌徳説話」であることを論じた。
69. 『今昔物語集』と『蜻蛉日記』に 見る屏風歌詠進の特異例	単	1985年02月	「武庫川女子大学紀要」 第32集	屏風歌は屏風絵を見ないで詠まれたという通説に対して、それはむしろ例外であることを、二つの事例の検討によって明らかにしようとした。
70. 延喜五年二月二十一日の河原院と 壬生忠岑	単	1984年11月	「武庫川国文」第24 号	延喜五年二月二日に、大納言藤原定国の四十賀の宴が催されたことは、「古今集」等によって知られているが、それが平安京の著名な邸宅の一つであった河原院において開催されたのであろうことを、忠岑の賀歌の分析から推定し、当日の忠岑の行動を明らかにしようとした。
71. 元永本古今集の詞書について	単	1984年02月	「武庫川女子大学紀要」 第31集	前稿「元永本古今集の作者表記について」にひきつづき、元永本古今集の作者表記をとりあげ、平安時代における自在な古今集書写の実態を明らかにしようとした。
72. 朝ぼらけ有明の月と見るまでに	単	1983年11月	「武庫川国文」第22 号	坂上是則の著名歌「朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」について、「朝ぼらけ」の語義の検証、「吉野の山に」の本文の存在についての検討を通じて、新たな解釈を提示した。
73. 紀師匠曲水宴和歌小考	単	1983年03月	「武庫川国文」第21 号	「紀師匠曲水宴和歌」は、「古今集」の四撰者を含む八人の著名歌人の歌、計24首からなる小歌集であるが、複数の先学によって偽書説が提出されている。本稿では偽書説の根拠を全て否定するとともに、「紀師匠」を紀貫之とする通説に対して、紀友則説を提唱した。
74. 元永本古今集の作者表記について	単	1983年02月	「武庫川女子大学紀要」 第30集	元永3年（1120）に書写された元永本古今集は、書道史上において著名であるが、平安時代に流布していた古今集の本文を研究する上でも、きわめて重要な資料である。本稿はその本文研究の一環として、作者表記を取り上げ、平安時代における自在な書写態度を解明した。
75. 古今撰者時代の私的歌会（査読付）	単	1982年03月3 1日	『国文論叢』第9号	「古今集」の撰者たちをはじめとする、いわゆる「古今撰者時代」の歌人たちが、貴顕の歌召に応じて多くの屏風歌や歌合歌を詠んでいることは、先学によって繰り返し指摘されてきたが、この論考においては、従来さして注目されていなかった、彼ら同士

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
76. 古今集雑体「短歌」考	単	1981年12月	「平安文学研究」第6 6 輯	による私的な歌会に着目し、その実態を明らかにしようとした。 「古今集」巻第十九に、長歌が「短歌」と題されているという事実は、古来不可解なこととして、さまざまな説明がなされてきた。本稿ではこれを撰者たちの謙辞ととらえる、新たな解釈を提示した。
77. 賀の屏風と屏風歌	単	1980年12月	「平安文学研究」第6 4 輯	古今撰者時代の屏風絵と屏風歌の関係性についての考察。賀の屏風は遠方から鑑賞されるために絵柄は大ぶりとなり、4帖に屏風歌が12首配され、日常使用される屏風は間近に鑑賞されるために絵柄は細密となり、4帖に屏風歌が24首前後配されたことを明らかにしようとした。
78. 宇多・醍醐朝の歌召をめぐって（査読付）	単	1980年10月	「中古文学」第26号	宇多、醍醐朝における天皇、上皇などの貴紳による歌召の実態を明らかにしようとした。歌召とは貴紳が歌人たちに和歌を召す行為であり、その盛行は和歌文学の隆盛をものがたる事実である。
79. 右大将定国四十の賀をめぐって	単	1978年10月	「平安文学研究」第6 0 輯	延喜5年2月21日に催された大納言右大将藤原定国の四十賀の宴に用いられた賀の屏風と屏風歌の具体相を、諸歌集の記述にもとづいて明らかにし、当時の屏風歌の実態を探ろうとした。
80. 屏風歌の具体相（査読付）	単	1978年06月	「国語と国文学」55巻6 号	「古今集」成立前後における屏風歌の実態について、諸資料にもとづいて考察し、その詠作の手順や、屏風絵と屏風歌とのかかわり等を明らかにしようとした。
81. 貫之集屏風歌の詠法	単	1976年10月0 1日	「国文学研究ノート」 第七号	「貫之集」の屏風歌が、絵画に対するどのような視点から詠作されているかを検証し、屏風歌は画中の人物の立場から詠作されているという従来の説に対する再検討を試みた。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 中古文学会秋季大会		2009年10月		シンポジウム・紫式部集研究の現在
2. 学会発表				
1. 古代・中世における関西圏の交通網と古典文学との相関性の研究	共	2007年03月	関西文化研究センター	廣瀬唯二、寺島修一 古代中世における関西圏の交通網に関する最新の情報を蓄積し、それらにもとづいて古典文学諸作品についての新たな解釈を提示すべく、徳原は山陽道と『伊勢物語』、廣瀬は北陸路と『紫式部集』、寺島は頭昭歌学における都と地方の問題をテーマに研究し、その成果を徳原が代表して発表した。
2. 「紫式部集」自撰説存疑	単	2004年04月1 0日	和歌文学会	紫式部の家集（個人歌集）である『紫式部集』は、紫式部自身が編纂した、いわゆる自撰本であると考えられてきた。本発表は従来のこの定説に再検討を加え、他人による編纂、いわゆる他撰本である可能性があることを指摘した。具体的には、いくつかの歌についての従来の解釈を見直すことによって、紫式部自身であればなすはずのない歌の配列が存することを指摘した。加えて、紫式部伝には修正が必要であろうことにも言及した。
3. 難波津の歌の呪術性について	単	2000年04月2 2日	和歌文学会	「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」という、古来著名な歌は、生命力を活性化させる呪歌であったと仮定することによって、考古資料にしばしばこの歌が墨書されていることの意味を説明できると主張した。
4. 『蜻蛉日記』の贈答歌	単	1992年11月	中古文学会関西部会	『蜻蛉日記』の特色ある歌ことばを追求し、その贈答歌の新たな解釈を試みた。
5. 『蜻蛉日記』の贈答歌	単	1990年08月	神戸大学国文学会	蜻蛉日記の贈答歌が、その部分でのやりとりにて完結しているのではなく、過去において詠まれた歌とひびきあう場合があることを指摘し、この作品内部にはりめぐらされた歌ことば相互のつながりを解説することなくしては、この作品を理解しえないことを論じた。
6. 「蜻蛉日記」の屏風歌と安和の変	単	1984年05月2 6日	中古文学会春季大会	「蜻蛉日記」安和二年八月条の、屏風歌に関する記述「とまりにけり」についての従来の解釈「（屏風歌が）採用になった」を否定し、全く新しい解釈「（賀宴が）中止になった」を提示した。この解釈によって同年六月の長歌と屏風歌との関連性が明らかとなり、筆者の心情をより深く理解できる。
7. 宇多・醍醐朝の歌召をめぐって	単	1980年05月1 1日	中古文学会春季大会（ 於学習院大学）	「中古文学」第26号掲載の拙稿「宇多・醍醐朝の歌召をめぐって」のもととなった口頭発表。
8. 右大将定国四十の賀をめぐって	単	1978年07月0 8日	和歌文学会	延喜5年（905）2月に催された藤原定国四十賀に際して制作された賀の屏風の屏風歌を諸資料から収集整理し、その屏風の実態を明らかにしようとした。
3. 総説				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 百人一首と百人秀歌	単	2005年11月01日	『関西文化研究』第3号	関西文化研究センター主催のフォーラム「雅俗交流と創造世界—百人一首の成立と享受—」における基調報告。『百人一首』と、その姉妹版とも言うべき『百人秀歌』との相互の関係について解説した。
2. 芥川—平安京の周縁—	単	2005年10月01日	『関西文化研究』第2号	関西文化研究センター主催のフォーラム「平安京の内と外—西国とのボーダーライン—」での講演内容の報告。高槻市を流れる芥川のあたりが平安京と異界との境界であったことを、『伊勢物語』や『古今集』などの文学作品から推定した。
3. 関西の今と昔をさぐる	単	2005年03月23日	武庫川女子大学関西文化研究センター主催第1回MKCR国際シンポジウムにおける基調報告	平安時代における平安京文化圏とその周縁部の実態を、文学作品や歴史資料の分析によって明らかにしようとした。
4. 元永本『古今和歌集』の雅びの世界	単	2005年02月15日	武庫川女子大学関西文化研究センター主催セミナーにおける研究報告	元永本古今集は平安時代の名筆として書道界において著名であるが、国文学研究の上からも、古今集の本文研究のために重要な資料であることを論じた。
5. 平安京の内と外—西国とのボーダーライン—	単	2005年01月29日	武庫川女子大学関西文化研究センター主催フォーラムにおける基調報告	平安時代における畿内と西国との境界を、「伊勢物語」や「古今集」などの文学作品の中に探った。
6. 平安文学研究ハンドブック	共	2004年05月20日	和泉書院	田中登・山本登朗編『平安文学研究ハンドブック』に、古今和歌集の成立についての研究史と今後の研究課題について解説した。
7. 百人一首研究集成	共	2003年02月	和泉書院	島津忠夫他編『百人一首研究集成』に、百人一首に関する既発表の論文3編が、戦後の百人一首研究における重要論文として収録された。
8. 歌ことば歌枕大辞典	共	1999年05月31日	角川書店	久保田淳、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』に、有馬山、猪名など8項目を執筆した。
9. 歌枕芦屋 歌枕生田	単	1998年01月20日	和泉書院	武庫川女子大学文学部国文学科編『阪神間の文学』に掲載。和歌の世界における芦屋と生田について解説した。
10. 日本古典文学研究史大辞典	共	1997年	勉誠社	『日本古典文学研究史大辞典』に、「百人一首」の成立、実態、享受史、研究動向等について記述した。
11. 琉歌大成・紹介	単	1994年06月	『解釈』第40巻6号	清水彰編著『琉歌大成』の紹介。
12. 資料紹介 「名士と人気者の千人料理」	単	1993年	『会員の広場』第22号	近代の文学者に関する未発掘資料の紹介。
13. 日本名歌集成	共	1988年11月	学燈社	久保田淳他編『日本名歌集成』に8項目を執筆した。
14. 別冊国文学『古典和歌必携』	共	1986年07月	学燈社	『古典和歌必携』所収「歌人事典」を分担執筆。在原業平、小野小町、紀貫之など31人の歌人について解説した。
15. 伊勢物語参考文献解題	単	1981年01月	小学館『鑑賞日本の古典 4』所収	「伊勢物語」に関する、中世から現代に至る注釈書、研究書、解説書等の中から主要なものを取り上げ、簡単な解説を加えた。
6. 研究費の取得状況				
1. 文部科学省学術フロンティア推進事業「関西圏の人間文化についての総合的研究」 継続	共	2007年		古代・中世における関西圏の交通網と古典文学との相関性の研究
2. 文部科学省学術フロンティア推進事業「関西圏の人間文化についての総合的研究」 継続	共	2006年		古代・中世における関西圏の交通網と古典文学との相関性の研究
3. 文部科学省学術フロンティア推進事業「関西圏の人間文化についての総合的研究」 新規	共	2004年		古代中世における関西圏の交通網と古典文学との相関性の研究

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2015年07月01日から学会委員	全国大学国語国文学会
2. 2011年04月01日から機関誌査読委員	神戸大学国文学会
3. 2001年10月01日から学会委員	和歌文学会
4. 2000年04月01日より関西西部会委員	中古文学会

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
	萬葉学会 解釈学会